



インタビュー

島精機製作所社長

# 島正博

# Ever Onward

# 限りなき前進

ルイ・ヴィトン、グッチ、アルマーニ……、世界のトップブランドも主要顧客だ。工業用編み機で世界シェア六割を超える島精機製作所は、日本の製造業が不況に悩む中、今期過去最高益を記録した。幾多の逆境を不撓不屈の精神で乗り越え、一代で世界的なエクセレントカンパニーをつくりあげた社長・島正博氏の道程はどのようなものだっただろうか。和歌山城を望む島精機製作所本社にてお話しいただいた。

島正博——しま・まさひろ  
昭和12年和歌山県生まれ。31年和歌山工業高校卒業、37年島精機製作所設立。平成8年東証1部上場。13年より和歌山商工会議所会頭に就任。

## 絶え間なき前進には ゆとりと準備が必要

——先ほど工場見学をさせてくださいましたが、特に印象に残ったのは工場全体が整理整頓されていて、とてもきれいなことでした。  
島 ありがとうございます。工場ができたのは一九六八年ですが、当初は見学にいらした方に食品工場ですかと言われたほどでした。

——編み機の工場ではなく。  
島 はい。世間には機械屋は油で汚いというイメージがありますが、それを払拭したいと思っていますし、何よりきれいな所からしかい

い機械は生まれません。  
——なるほど。今年三月決算の業績は過去最高だったとお聞きしていますが、好成績はそういう心掛の賜物ですね。  
島 おかげさまで、社員数千六百八十名で、売上高は六百九十八億九千七百万円（前期比四十八・五割増）、経常利益は百九十億八千五百万円（同百二割増）でした。売上高のうち、海外が九十一割を占め、そのうち約七割が中国や香港などのアジア諸国です。

——いま日本では製造業が元気がないといわれていますが、御社の好調の秘訣は何でしょうか。  
島 わが社の事業は主に手袋編み機、ニットなどの繊維製品のコンピュータ横編み機、そしてそのデザインシステムの三本柱ですが、なかでもアジア諸国ではコンピュータ横編み機の需要が爆発的に増えているのです。  
現在、中国の経済発展が著しいのはご存じのとおりですが、二〇〇一年末に中国がWTO（世界貿易機構）に加盟して以来、欧米に安価な中国産の衣服が津波のように押し寄せていきました。二〇〇四年までは輸入規制がありました。二〇〇五年に緩和され、世界中の繊維業界が一時混乱に陥りま

した。当然設備投資も見合わされ、当社も注文が入らずやきもきしていたのですが、実はその二〇〇五年にこれまでにないほど大きな工場を建設したんですよ。  
——不況の時期に新たな工場を建設したと。  
島 いずれつくりたいと思っていたので着工したのですが、「なぜこの時期に？」と社員も外部の人たちも思っていたでしょう（笑）。  
ところが、二〇〇六年から中国でも人件費の高騰などから製造業の機械化が急速に進み、コンピュータ横編み機の需要が爆発的に増えました。あの時、大きな新工場

を建てた。当然設備投資も見合わされ、当社も注文が入らずやきもきしていたのですが、実はその二〇〇五年にこれまでにないほど大きな工場を建設したんですよ。  
——不況の時期に新たな工場を建設したと。  
島 いずれつくりたいと思っていたので着工したのですが、「なぜこの時期に？」と社員も外部の人たちも思っていたでしょう（笑）。  
ところが、二〇〇六年から中国でも人件費の高騰などから製造業の機械化が急速に進み、コンピュータ横編み機の需要が爆発的に増えました。あの時、大きな新工場